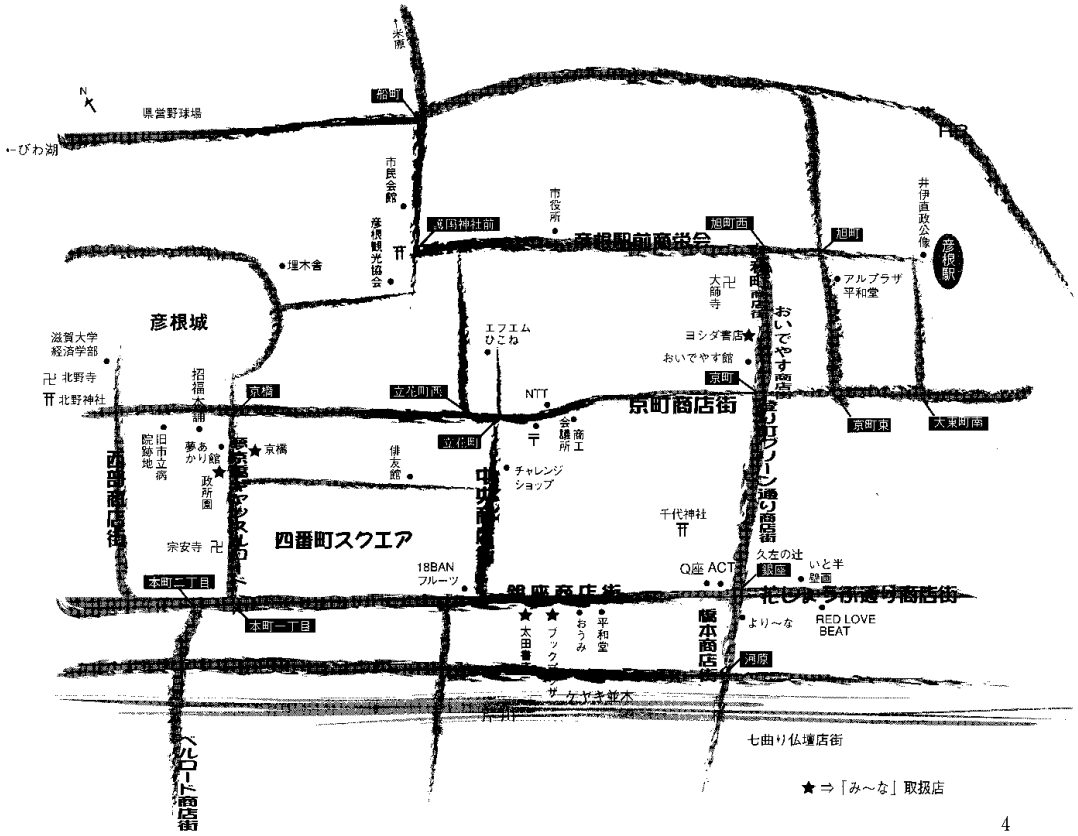
彦根へ行こね

彦根TASTEを味わいに…

久しぶりに彦根を歩きたくなった。
前回の彦根・長浜の商店街特集（52号）から5年。
今の彦根のまちがどんなふうに息をしているか…。
いつも車で通る町並みを歩いて
その呼吸のなかにたたずんでみることにした。
今回の特集では、「み～な」の感じた
匂い、手触り、風味…の一端をご紹介しよう。
あなたの彦根テイストは、ご自分で行って、歩いて、確かめて、ネ。



ぷらぷら歩こう商店街

花しょうぶ通り

今、花しょうぶ通りが面白い。
けっして、大きくはないけれど、不思議なパワーがあふれている。
スタート地点は、久佐の辻と銀座の街との交差点。
さあ、それでは、買い物かごを片手に持って、元気を探しに出かけましょう。

▲花しょうぶ通りのまちづくりについて語る（左から）和田一繁さん、小杉共弘さん、中溝雅士さん（より～なで）

八百屋さんに魚屋さん、お肉屋さんに蒲団屋さん、下駄屋さんに和蝋燭屋さん…。生鮮三品はもちろんのこと、ないものなんてほとんどない。まさに、商店街の隠れたツボだ。ここを歩けばなんでも揃う。

それもそのはず。商店街の裏側は、かつての色町・歓楽街。江戸時代には、小粋な旦那衆で賑わっていた。と、なれば、人の出入りのさかんな街に、いろんな業種があったことにもうなずける。

幅四メートルほどの道を歩けば、そんな当時を偲ぶ下町情緒が目にとまる。商店街の入り口に位置する旅館「とばや」は、創業明治十三年という彦根で最も古い老舗の旅館。玄関先には、「鳥羽や」と書かれた当時のまんまの暖簾がかかる。その向かい、「麹七」と書かれた店は、元禄末期から続く麹屋さん。お店の名前は、初代七兵衛さんの名前からきているのだとか…。その先を少し歩けば、バリカンと櫛のオブジェが飾られるモダンな洋館、「宇水理髪店」が見えてくる。

一方、白壁の蔵の風情が残るのは、井伊家の御用商人だった酒屋の「布市」さん。百年以上経ってもその趣は変わらない。そのおとなりで、昔ながらのたたずまいを残すのは、木造平屋の「梅玉湯」。昭和にタイムスリップしたような、癒し系のお風呂屋さんが懐かしい。

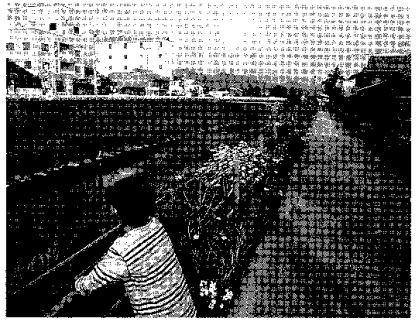
しかし、この通り、けっして古いだけの街ではない。よくよく見れば、古さの中に新しい手が加えてある。たとえば、店を彩るしょうぶの花や、統一されたお店の看板。「いと半」さんの塀に書かれたおおきな壁画。高札が屋号を伝え、街路灯には彦根かるた。そして、中古レコード店に生まれかわった江戸時代の寺子屋からは心地よいロックのビートが流れ出す。

あやしい取材班▼

彦根の道を行く（芹橋二丁目から新町七曲りあたり）

仏壇街は、どん突き、クランク、七曲りなのだ

五月のある晴れた土曜日の午後、あやしい取材班は古くて新しい彦根テイストを探しに芹川のほとりへとやってきた。我々に今回与えられたテーマは「道」。さて、どんな道が我々を待っているのだろうか。



▲七曲り側よりもお城側の堤の方がほんの少し高くなっているという芹川の堤防。そう言われれば少し低いような気も…。

彦根の町を歩いてみると、やたらにどん突き（行き止まり）や筋違い（クランク）の道が多いことに気付く人が多いはず。どん突きも、筋違いも、敵の人間や馬が簡単にはお城にたどり着けないようにするための、いわば軍事上の必要性から生まれた「町割り」であり、城下町にはよく見られるそうだ。…とは言っても、同じ城下町なのに長浜にはあんまりない気もするな。お城ができた時代が違うからかな？

取材班は、まず足軽屋敷があったとされる芹橋二丁目辺りに足を踏み入れてみた。路地のような狭い通りに筋違いの交差点を発見。もちろん建物は建て替えられているが、町全体に何やら江戸の城下の空気が漂っているようだ。お風呂屋さんもいい感じの佇まいである。この辺りにもどん突きは数多く存在している。

▲狭い路地の向こうには何が…？

芹橋二丁目から一丁目を過ぎ、芹橋を渡って東へ折れると、いわゆる「新町七曲り」と呼ばれる仏壇屋が軒を連ねる通りである。ここは、昔、城下と中山道とを結ぶ街道であった。

さて、仏壇の町としての七曲りの歴史は実はそう古くはない。浄土真宗が農家を中心に広まり、江戸幕府もキリスト教を禁止する政策を進めた結果、キリスト教信者ではないという証拠として庶民の家庭に仏壇を設けるのが一般的になったとされているから、概ね江戸時代の中期以降のことだ。つまり、新町七曲りに仏壇屋さんが軒を連ねるようになったのは、どん突きや筋違いなど、彦根城下の道路整備が一段落してかなり後のことになる。

▲芹橋２丁目あたりのお風呂屋さん

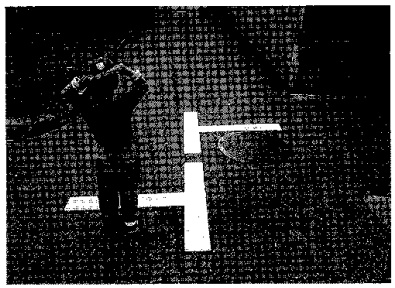
では、なぜ彦根に仏壇なのかと言うと、それは、仏壇職人のルーツに秘密がある。※七職と呼ばれる仏壇職人は、もともと甲冑などの武具を作る職人だったと言われているのだ。戦の絶えなかった戦国時代から江戸の太平の世となり、武具の需要は激減。職人は生活維持のため、新たな事業展開を迫られる。そこで目を付けたのが当時、需要が増え始めていた仏壇だったというわけだ。武具製造で培われた漆の塗りや金具細工などの技術は、仏壇、仏具の製造の場を通じ、現代に脈々と受け継がれてきたのである。

▲鍵状に曲がった七曲りのクランク

お城から少し離れ、街道沿いのこの町には、多くの人たちが行き交い、新しい産業やそれを支える職人たちを受け入れる自由な雰囲気があったに違いない。つまり七曲がりは、江戸時代における新興工業地域だったのである。

近代の彦根の地場産業であるバルブ（橋の擬宝珠製造技術から派生）やファンデーション（女性下着、足袋の製造技術から派生）なども、古くからの職人の持っていた技術の転用であり、その工場群も、お城からは七曲りと同じような距離にある。こうした共通点も興味深い。

ただし、七曲りの歴史に関する資料は、度重なる芹川の氾濫で流失してしまっていて、ほとんど残っていないらしい。芹川の堤防はお城側の堤の方がほんの少し高くなっていて、いざという時には、七曲りの側が切れるようになっていたというのだ。今、堤防に立ってみても、そんな差があるようには見えないのだが…。



▲筋違いの交差点に子どもも思わず立ち止まる

さて、七曲りのシンボルとでも言うべき「クランク」は町の真ん中あたりにある。その近くにあるお地蔵さんの横には芹川から引かれた農業用水の水路が走っているのだが、ここには最近、蛍が戻ってきたそうである。仏壇とお地蔵さんと蛍、何やら因縁のようなものを感じなくもない。

橋の向こう側の花しょうぶ通りでは、商店街に新しい動きがあるようだが、七曲りには今も昔も変わらないゆったりとした時間が流れているように思える。

犬と散歩をしているおばさんに出会った。言葉に東北訛りを感じたので、尋ねてみたら青森県の弘前市の出身だそうだ。そういえば、弘前へは学生時代に行ったことがあるが、どん突きと筋違いのやたらと多い城下町だったな…。そんなことを思い出しながら、あやしい取材班は江戸の匂いの残る七曲りを後にするのだった。

（みわのぶひこ）

お知らせ

全国の仏壇産地を、持ち回りで開催されている「全国伝統的工芸品仏壇仏具展」が、今年は10月18日(土)～20日(月)に滋賀県立文化産業交流会館を中心に開催される。これを記念し、彦根仏壇事業協同組合では、「祈りの風景」フォトコンテストを実施しており、9月20日(水)まで作品を募集している。入賞者には賞状と賞金および副賞がある。

詳細は、㈲吉田松蔵商店内彦根仏壇事業協同組合フォトコンテスト係（0749－23－8322）までお問い合わせを。

※七職
仏壇製造における七部門の専門職のこと。専門職は「木地師」「宮殿師」「彫刻師」「飾り金具師」「塗り師」「蒔絵師」「金箔押師」の七つ。

富久や FUKUYA
食を通じて、すてきな時間をあなたに
社員食堂、お弁当、会議食、運動会やイベント時のお食事、パーティーなどのオードブル、etc・・・
お問い合わせ下さい。
湖北：Tel 0749(62)0692
湖東：Tel 0749(42)2373